

鳥取砂丘観光の課題と方向性—砂丘政策の歴史的分析から

研究員 松田 真由美

1. はじめに

近年、観光と自然環境や地域の伝統文化との共生を図るサステイナブル・ツーリズムという考え方が出現し、世界各地で新しい観光のあり方が実践され始めている。日本でも従来の団体客対応型のマス・ツーリズムからの転換を図るために各地で様々な試みがなされているが、特に豊かな自然が残る地域では新しい観光のあり方の一つとしてエコツーリズムの考え方が導入されるようになってきている。環境省も本年より本格的なエコツーリズム推進策を展開している。

鳥取県内で自然を観光資源とする代表的な観光地として鳥取砂丘がある。鳥取砂丘は県内最大の観光地にも関わらず、近年観光客は伸び悩んでいる。鳥取県や鳥取市は砂丘観光活性化のために様々な取り組みを行っているが、未だ有効な観光活性化策を打ち出すまでには至っていないように思われる。

そこで本稿では、鳥取砂丘の利用と政策の歴史を振り返ることにより、砂丘政策の抱える諸問題を明らかにし、それに対する現在の取り組みを述べるとともに、今後の方向性を展望する。まず、鳥取砂丘の概要と観光の状況について紹介する。次に、砂丘の景観と観光の経緯を振り返るとともに、かねてより問題となっている景観悪化の背景を明らかにする。続いて、それに対する現在の取り組みと残された課題を検討し、最後に今後の砂丘観光の方向性としてエコツーリズムの導入を提案する。

2. 観光資源としての鳥取砂丘

2.1 鳥取砂丘の概要

鳥取砂丘は日本一の海岸砂丘として鳥取県を代表する景勝地であり、県内最大の観光資源の一つである。鳥取砂丘は、山陰海岸国立公園の西部に位置しており、岩の造形美が特徴的である国立公園の東部とは好対照の景観となっている。

鳥取砂丘とは、正確には福部砂丘から白兎砂丘までを含めた東西16km、南北2kmに広がる地域全体を指すが、観光用として利用されているのは良好な砂丘景観が見られる中心地域である。この地域は国立公園の特別保護地区と天然記念物に指定されている。

鳥取砂丘はその景観に大きな特徴がある。海岸砂丘にも関わらず起伏が大きく、高低差は最大92mにもなる。海岸近くの馬の背と呼ばれる第二砂丘列でも海拔は47mになる。日本各地に砂丘は見られるが、鳥取砂丘の高低差は日本一となっている。また、風による砂の移動・跳躍によって風紋、砂柱、砂簾、スリバチなど多様な地形がみられることも特徴である。特にスリバチが多く見られることが大変珍しい。スリバチとは内陸砂丘に見られるバルハン¹に類似した地形で、風によって砂丘に作り出される三日月状の窪みを指す。追後スリバチなど、海岸

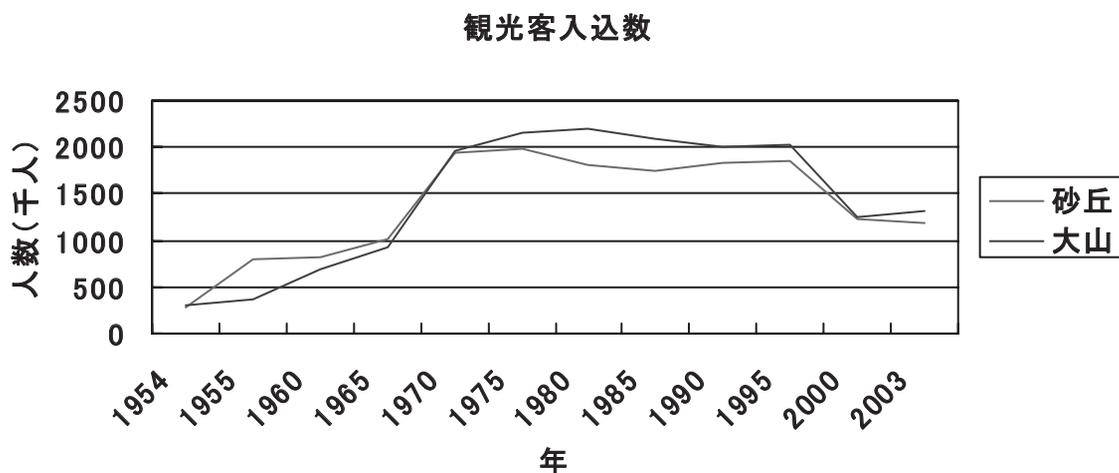
砂丘でありながら内陸砂丘の特徴を持っていることが大変高く評価されている。このような砂丘の地学的価値が天然記念物に指定された理由の一つである²。

鳥取砂丘は千代川から日本海に流れ出た土砂が北西の風と波に打ち上げられてできたものである。まず、中国山地や川の流域の花崗岩が風化浸蝕されて崩れ落ち、それらが川の水によって運ばれるうちに小さな砂粒になり、日本海に流れこんで海底に堆積する。それが冬の北西の季節風によって海の波と共に海岸へ打ち上げられる。打ち上げられた砂は海風によって内陸へと移動して砂山を作るのである。これらの営みが7万年から10万年くり返されて、鳥取砂丘が形成されたのである。このように浸蝕による地形の変化が典型的に見られることも、砂丘の価値が評価されている理由の一つである。砂丘は生きてるといわれるのはこのサイクルが現在でもくり返されているためである。

2.2 鳥取砂丘の観光

鳥取砂丘へ観光客が急増し始めたのは1955年である。1954年に約28万人だった観光客は1955年には約80万人に増加し、もう一つの景勝地である大山を逆転した。その後、観光の大衆化に伴い、1963年には砂丘ブームが到来し、1965年には観光客が100万人を突破、1972年には過去最高の228万人を迎えた。それ以後、徐々に観光客が減少し、1983年には160万人にまで減少したが、以降180万人前後で推移していた。1998年に統計の取り方が変更されたため、それ以後2003年までの鳥取砂丘単独の観光客数を把握することはできないが³、砂丘を含めた周辺地区全体への入込み客数は以後120万人前後で推移してきている⁴。

鳥取砂丘は、鳥取県で最も有名な観光地であり、鳥取県を訪れる団体ツアーの多くのルートには鳥取砂丘が入っている。しかし、砂丘を訪れる観光客のほとんどは、砂丘東側の入り口から砂丘を眺めるだけか、入り口から日本海に面した丘である通称「馬の背」まで行って戻ってくるコースを辿る。団体客の場合、砂丘を見学した後に入り口付近の土産物屋で食事を取り、



¹ 風上側が緩やかで風下側が急に落ち込んで急傾斜となっているすり鉢型の凹みのある半球あるは馬蹄形の砂丘の地形（田中、星見、松田（1994））。

² 鳥取県教育委員会（1961）17 - 18 ページ。岩永実（1964）「地形および地質からみた鳥取砂丘の学術的価値」（『鳥取砂丘調査報告書（第二集）』、1 - 4 ページ。）

³ 鳥取県では2004年1月より砂丘の各入り口に砂丘カウンターが設置され、正確な訪問者数の把握が可能となっている。

⁴ 鳥取県（2003）『平成14年観光客入込動態調査結果』よりグラフ作成。但し、作成の都合上1972年の数字は正確に反映されていない。

お土産を買うというのが典型的な砂丘観光の形態である。したがって、砂丘での滞在時間は一般的に非常に短いといえる。

このように砂丘観光が低迷している原因の一つは、個人や小グループの旅行が増加し、観光の流れが体験・学習型観光へと変化する中、自然景観を見せるだけでは観光客の多様なニーズに対応できなくなっていることである⁵。もう一つの原因として考えられるのが、砂丘の景観が悪化していることである。前述のような砂丘本来の営みが崩れ、砂丘の表面の砂が動かなくなったため、雑草が繁茂し、砂丘全体が草原化しているのである。

3. 鳥取砂丘の景観と観光の変遷

砂丘景観が悪化していることを示す象徴的な現象が砂丘の草原化である。ここでは砂丘が草原化するに至った経緯を観光の動向を交えながら述べる⁶。

3.1 農地、軍用地、観光地としての砂丘（第二次世界大戦以前）

砂丘は初めから観光地としての認識されていたわけでも、観光地として発掘されたわけでもなかった。砂丘は、17世紀中ごろから19世紀の終わりまでは植林と開拓によって農地として利用された。その頃、砂丘では飛砂が激しく、砂丘背後にある田畑や家が埋まってしまうため、植林を行うことによって飛砂を防ぐ努力がなされた。

砂丘はまた19世紀中ごろから第二次世界大戦が終結するまでの約50年間、軍事訓練の場としても利用された。その間、自然のままに放置された結果、砂丘の景観が保存されることになった。1933年には砂丘を天然記念物に申請する動きもあったが、軍事演習地であるため認められなかった。

砂丘は明治時代から市民の行楽地としても利用された。浜出や小学校の遠足や運動会も砂丘で行われた。但し、利用された場所は限られていて砂丘の大部分は人もめったに近づかない荒涼とした大地だったといわれている。

3.2 植林決定—砂丘緑化論争（1950年代）

戦後、軍用地として使用されていた砂丘が国から払い下げられることになった。それに当たって、砂丘を植林して農業開発のために使うべきか、そのまま保護するべきかという論争が起こったのが1950年代である。1950年、県が本格的な植林計画を発表すると、観光業者や文化財関係者から砂丘保存の主張が高まった。その後の論争は砂丘緑化論争といわれている。最終的に砂丘を文化財として保護するよりも食糧増産のために開発することの方を重要視する決定が下された。

1952年5月、鳥取市は浜坂、湖山の両砂丘について国から払い下げを受ける契約に調印したが、払い下げの条件は、①潮害、風害防備林造林用地として使用すること、②買い受けてから20年間はその使用目的を変更・廃止してはならないことであった。これによって1952年～1972年までの20年間は砂丘に植林することが義務付けられたことになる。また、植林された土地は森林法により保安施設地区（将来の保安林）として指定された。これに加え、1953年3

⁵ 鳥取砂丘観光活性化懇談会（2001）『私たちの誇り 鳥取砂丘—鳥取砂丘観光活性化のための提言』2ページ。

⁶ 経過の概略は末尾の年表「鳥取砂丘とその政策の変遷」にまとめたので合わせてご覧いただきたい。

月、海岸砂地地帯農業振興臨時措置法（砂丘開発法）が施行され、砂丘地への植林にかかる費用の半分を国が補助する制度ができた。この二つの動きによって砂丘地における植林推進が決定的になったのである。

また、砂丘内の造林地は1972年10月まで、浜坂地区と賀露地区に無償貸与され、それ以後は両者に無償譲渡されることになった。これと平行して、農地としての砂丘利用の研究を進めてきた鳥取大学と鳥取市が砂丘の土地を分け合うことで合意した。この結果、国有地であった鳥取砂丘の土地は、鳥取市、福部村、鳥取大学、地元住民に分割されることになった。

一方、砂丘保存を主張していた地元文化人らも巻き返しにかかった。1953年4月、県文化財専門員は砂丘を守るため、砂丘を文化財に指定するように国に直接申請書を提出した。これに対して、砂丘全域の払い下げを要望していた地元住民が反対したが、鳥取市は最終的に緑化と保存を両立させる道を模索した。1954年7月、当初想定されていた天然記念物指定区域を大幅に縮小して、約30ヘクタールを文化財として申請し、認められた。指定の理由は、①海岸砂丘としての地形的特色と②豊富な砂丘植物の群落の生育であった。

3.3 保護勧告から植林除去まで（1960年代～70年代初）

植林が拡大してくるにつれて、砂の動きが止まってしまう、地形の変化、スリバチの消滅、地肌の露出、雑草の繁茂など砂丘に悪影響が開始した。これに対して、保安林の解除・伐採と天然記念物の指定地域の拡大を求める報告書が相次いで出された。

1962年1月、「鳥取砂丘調査報告書—第一集」が提出された。この報告書は、砂丘を文化財及び観光資源として明確に位置づけ、砂丘を自然のまま保護するためには51.8ヘクタールの保安林地を解除し、さらに天然記念物の拡大指定をする必要があるとの勧告を行なった。この報告書を受けて、天然記念物の指定地域拡大については、指定地域の面積は縮小されたものの、既指定地域外縁の未植林地域までが天然記念物として追加指定された。しかし、保安林の解除は実行されなかった。保安林解除の対象地は浜坂地区に無償譲渡が決定していた土地で、保安林を伐採するためには浜坂地区の同意と保安林解除の権限を持つ県、林野庁の同意が必要だったためである。

1964年に提出された「鳥取砂丘調査報告書—第二集」で再度、鳥取砂丘の自然物としての価値が確認され、保安林解除・伐採が要望された。その後、しばらく地元観光業者と経済人による植林除去をめぐる陳情とそれに対する地元住民からの反対陳情が続いた。しかし、この頃農業に衰退の兆しが見られ、地元でも農業より観光への期待が高まり、鳥取砂丘を観光資源として利用することで合意した。しかし、実際に植林が除去されたのは、植林除去勧告が出された10年後の1972年だった。これはちょうど浜坂地区への無償譲渡期限にあたっている。これによって「開発か保護か」の論争に一応決着がついたといえる。

1963年、砂丘を含む山陰海岸は国定公園から国立公園に昇格し、砂丘中心部の113ヘクタールが特別保護地区に指定された。しかし、1969年には当時国立公園を管轄していた旧厚生省によって鳥取砂丘の保護状態は劣悪と評価された。

1960年代から70年代初めにかけては、観光の大衆化にともない、砂丘観光が急速に発展した時期である。1960年には年間80万人だった砂丘観光客が1972年には過去最高の220万人を突破した。各種の観光施設やドライブインが民間業者の主導で建てられていった。

3.4 植林除去から草原化（1970年代～80年代）

1970年代から80年代は砂丘の草原化が本格的に進み、砂丘環境が悪化した時期である。これに対して、2度にわたる植林除去と除草など砂丘再生に向けた動きが開始された。第一回目の植林除去は1972年～74年にかけて実施された。しかし、伐採の効果はなかなか現れなかったため、1976年、さらなる植林除去に向けて鳥取市観光協会が植林除去を知事に陳情し、その後鳥取商工会議所や鳥取文化財協会などとともに署名運動を開始した。その後、1回目の伐採の効果が表れないことを理由に、保安林を管轄する林野庁が再度の伐採に対して難色を示したため時間を要したが、1982年から第二回目の植林伐採が行われた。

ところが、伐採跡地には再びニセアカシアや松、雑草が繁茂し始めた。植林地にたまっていた雑草の種が伐採によって一斉に発芽したのである。機械除草では雑草が大発生する可能性があることから、人力での除草も試みたがそれにも限界があり、広範囲に渡って除草剤を散布した。5年後の1988年に提出された報告書によって、砂の移動の促進と砂丘植物の増加などが伐採の効果として確認された。

この時期は、砂丘観光が全盛期を過ぎて停滞期に入った時期である。1972年に220万人を越えた観光客は1980年代の初頭には160万人台にまで落ち込み、県営の宿泊施設「鳥取青年の家」や民間の観光施設「砂丘パレス」が閉鎖された。

3.5 除草活動と新たな観光に向けた動き（1980年代末から1990年代）

1980年代末、二度にわたる伐採と除草にもかかわらず草原化はさらに著しくなり、環境庁は1990年、ついに草原化防止のための調査を開始した。その調査結果を受けて、1991年、鳥取県は、鳥取市、福部村の協力の下に「鳥取砂丘管理調査協議会」を設立し、専門家によって構成される「鳥取砂丘保全協議会」の助言・指導を受けながら、3カ年計画で除草実験を開始した。その結果、一斉除去を行っても砂丘固有植物への影響はなく、砂の移動も活発になることが確認され、さらなる除草の必要性が明らかになった。

そこで、1994年、鳥取県は「鳥取砂丘景観管理協議会」を設立し、除草作戦を本格的に展開していった。専門家らによる「鳥取砂丘景観保全調査研究会」は、砂の移動調査や植生調査等の基礎調査に基づき、景観保全の年次計画をたてた。1991年から2003年までの13年間で、延べ332ヘクタールを除草し、スリバチの整備、堆砂垣の整備、移動した砂の除去なども実施した⁷。

観光の面から言えば、1990年以降は砂丘観光の復活模索期といえる。1990年前後には地域活性化議論の流れの中で、鳥取砂丘の観光のあり方、砂丘の将来像をめぐる議論が地域のリーダーの間で活発になった。1989年、県東部の活性化方策の一環として鳥取砂丘に注目した鳥取青年会議所が中心となって「砂丘デザインフォーラム」が開催され、「砂丘サイエンスパーク構想」を出された。これを受けて翌年には、産、官、学から関係者が参加する「鳥取砂丘砂かけフォーラム」が発足した。また、草原化が顕著になったこともあり、この時期には新聞で砂丘特集が組まれ、鳥取砂丘に関する県民意識調査が実施された。意識調査の結果は、地域のリーダーの間で盛り上がった議論も市民のレベルにまでは浸透していないことを示していた。市民フォーラムでの議論を受けて、1996年、県から砂丘博物館建設計画が出されたが、費用

⁷ 鳥取砂丘景観保全協議会（2004）『鳥取砂丘景観保全調査報告書』。

対効果の視点から大規模施設建設の必要性が疑問視され、1999年新知事によって計画は凍結された。

4. 砂丘政策に関わる諸問題

砂丘の景観悪化の経緯をふりかえると、その背後には次のような政策上の問題があったと考えられる。

第一に、政策決定者が鳥取砂丘全体の利用に関する長期的なビジョンと計画を持たないまま、砂丘の利用についての決定を下したことである。特に1950年代に、国から砂丘を払い下げられた際、食糧難を克服するために砂丘を農業用地として利用することを優先した。このとき、自然資源としての砂丘の価値を認めて砂丘保護のために植林に反対する声があったが、当時の政策決定者は農業開発のための植林をあくまでも優先した。この時点では砂丘の観光資源として利用と農地としての利用が両立すると判断したのであろう。しかし結果的には、砂の動きを止めるための植林促進と、砂の動きをとめないことが必要な砂丘保護という本質的に相反する政策を同時に取ったことになり、その後、砂丘という自然から草原化というしっぺ返しを受けることになったのである。

第二の問題点は、砂丘が払い下げられた際に、砂丘地の一部を民間人に分配する約束をしてしまったことである。これによって、砂丘の保護対象地域内に私有地ができ、砂丘の土地の権利関係が複雑になってしまった。その結果、砂丘の保全を行う際にも、砂丘での観光を促進する際にも利害調整に時間がかかり、統一した方向性が打ち出しにくくなってしまった。

第三の問題は、鳥取砂丘全体を一括して管理する体制が整っていなかったことである。まず、砂丘全体の保全や利用を計画的に進める責任主体が不明であった⁸。砂丘政策策定の主体は砂丘の土地所有者である鳥取市と福部村か、鳥取県か、それとも国立公園を管轄する環境省かということが不明確であった。例えば、砂丘景観の保全に関わる調査の実施主体が時代によって鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、環境省、鳥取県と異なっていることを見ても責任主体のあいまいさが理解できる。この点、国立公園にナショナル・パーク・サービスという管理機関を設置し、管理責任の所在を明確にしているアメリカの国立公園システムとは異なっている。また、鳥取砂丘に関する決定は国の縦割り行政の影響を常に受けている。砂丘政策に影響を及ぼす省庁には、天然記念物を管轄する文部省（現文化庁）、国立公園を管轄する厚生省（現環境省）、植林された保安林を管轄する林野庁などがある。例えば、砂丘を保護するために植林を伐採するにあたっては林野庁の許可が必要である。また、砂丘の中でも観光用に利用されている地域は国立公園内にあるため、草原化を食い止めるために除草活動を行う際にも環境省の許可が必要である。このように、中央集権による縦割り行政は砂丘に関する政策決定に大きな影響を及ぼしており、地方自治体の判断だけで草原化に迅速に対応することができない状況となっている。

この他に草原化を招いた間接的な要因の一つとして、砂丘に対する一般市民の関心の低さがあげられる。草原化が顕著になった1990年に朝日新聞社によって実施された砂丘保全に関する県民意識調査⁹によれば、市民は砂丘保全のための行政の対応が不十分であると考える一方、

⁸ 佐藤一郎（1980）「鳥取砂丘の保護とその対策」『昭和54年度天然記念物鳥取砂丘特別調査報告書』鳥取市教育委員会において鳥取砂丘管理体制の整備の必要性が指摘されている。

⁹ 大村康久編（1993）『鳥取砂丘』富士書店に掲載の結果を参照。

砂丘保全への関心はそれほど高くないという結果となった。また、砂丘の保全に関心があると回答した人でも保全運動に参加したいと思う人は少なかった。このような市民の砂丘に対する無関心も砂丘の景観悪化に拍車をかけたと考えられる。

市民の関心の低さの背後には次の二つの問題があるように思われる。第一の問題は、除草や森林伐採が環境の回復につながるという砂丘保全特有の構図である。一般的には森林の伐採や植物の採取は環境を破壊する行為であり、植林は環境を回復するために行なうものである。しかし砂丘の場合には、植林は人為的に行われたものであり、人為的に植林を伐採することが砂丘本来の環境を回復することにつながるのである。これは環境保護の一般的な構図と矛盾しており、そのことが砂丘景観の回復・保全に関する一般的な理解を得にくくしていると思われる。第二の問題は、県民の間で砂丘の位置付けや価値に関する共通認識がもたれていないことである。県民が砂丘を全国でも有数な観光地として捉えているか、砂丘の価値をどこに置いているのかによって、砂丘の草原化に対する考え方が異なってくる。砂丘の自然景観としての価値に重きを置いていない場合には、砂丘は草原化するままにしておけばよいという考えになるのである。

5. 現在の取り組みと残された課題

前述の問題のいくつかは徐々に解決されつつある。第一に、砂丘の景観回復の方向性と実施体制が確立しつつある。現在、「鳥取砂丘景観保全協議会」(「鳥取砂丘景観管理協議会」から改組)が保全事業計画の策定や事業の実施を行い、地元の大学の研究者で構成される「鳥取砂丘景観保全調査研究会」が政策決定の基礎となる各種の科学的調査を行うという役割分担ができていいる。砂丘保全に関する意思決定機関である「保全協議会」には、砂丘に関する利害関係者が参加している。参加者は、環境省の現地国立公園担当者、鳥取県、鳥取市及び福部村の観光担当部局、それぞれの教育委員会、砂丘地に土地を持つ地元地権者、研究者、観光業者、自然解説活動や砂丘観光に関わる市民活動団体などである。また、2004年5月には景観再生の目標が「天然記念物及び国立公園に指定された昭和30年代当時の姿に復元すること」と定められた。今後は、複数の利害関係者で構成される保全協議会の効果的な運営のあり方や、砂丘を昭和30年代当時の姿に復元するための具体的な道筋についての合意形成が課題となつてこよう。

縦割り行政に関しては、砂丘の保全・利用活動について環境省や文化庁、林野庁の許認可が必要であることには依然として変わりはない。しかし、県レベルでは「鳥取砂丘室」が設置され、砂丘に関する観光行政、保全行政、国立公園行政の窓口を一本化することによって中央の縦割り行政の弊害を少しでも軽減する努力がなされている。今後は景観保全、観光促進の両面において、鳥取県と鳥取市のさらなる連携の強化と役割分担の明確化が求められるであろう。

砂丘への市民の関心を高めるための方策として、これまで行われてきた専門家による調査活動や除草活動に加え、本年から除草を行うボランティアを導入している。本年の除草活動には鳥取県外からの参加者も含め、数多くのボランティアが参加しており、徐々に砂丘保全に対する市民の関心も高まってきているといえよう。

景観保全の動きに加え、観光活性化の面からも動きが見られる。砂丘関係者一同が出席する「鳥取砂丘観光活性化協議会」が設置され、観光に関する方向性を決定する場が設定された。また、これまでのような主に団体客向けに景色を見せるだけの観光に加えて、個人客向けの体験型観光の試みがなされはじめている。市民やNPOのアイデアで砂丘の新たな魅力を発

信していこうという県の事業「鳥取砂丘新発見伝事業」も2000年より開始された。これまで、鳥取砂丘の解説を行うツアーや小中学生向けのサマーキャンプ、凧揚げやサンドボード、能などの伝統芸能、冬の砂丘のライトアップ、地元名産品を使った料理の提供など様々なイベントが試みられている。これらのイベントによる観光客増加効果は未だ把握されていないが、地域住民の砂丘に対する関心や愛着を高めることに貢献していると考えられる。また、市民によるイベント開催支援の副次的効果として、市民の中に砂丘観光を担って行く核となるリーダーやボランティアが育成されてきていると予想される。今後は、一般県民が砂丘を地域の誇りとして認識し、砂丘保全の問題を自らの問題として考えていくような気運をさらに盛り上げていくことが課題となってくるだろう。

観光活性化面における今後の大きな課題は、現在行なわれている様々な取り組みを一つに束ねる砂丘観光のコンセプトを打ち出していくことである。2001年に県レベルでは「鳥取砂丘観光活性化のための提言」が提出された。これを受けて市でも2003年に「鳥取砂丘西側整備構想案」、2004年には「鳥取砂丘整備構想案」を取りまとめた。両者とも根底に流れているコンセプトは「自然体験型観光」である。問題は、自然体験型観光という名の下で想定される具体的な内容が人によって異なる可能性があるということだ。したがって、「自然体験型観光」の背後に観光の理念を設定しておく必要があると思われる。

6. 砂丘観光の今後の方向性

そこで最後に、砂丘観光の理念としてエコツーリズムの考え方を導入することを提案したい。エコツーリズムは自然をベースにした観光のあり方の一つであり、現在、エコツーリズムの考え方に沿った観光が世界各地で実践されている。エコツーリズムという言葉に定まった定義は存在しないが、その要素についてはある程度共通性が見られる。エコツーリズムとは、自然の中で行なわれる活動であり、解説的活動を通して観光者が対象となる自然環境や文化を理解し楽しみ、環境・文化保全の意識を高めること、またそれによって目的地の環境・文化などの資源を保全することに寄与する観光である。エコツーリズムはもともと貴重な自然環境を保護することを目的に始められた観光であることを考えると、人をひきつける貴重な自然が存在していることがエコツーリズムの成り立つ前提であると考えられる。

エコツーリズムの理念を砂丘観光に導入することによって、「自然体験型観光」に解説活動や環境保全といった一定の理念を加えることができる。砂丘観光の歴史を振り返ってみると、砂丘においてはマス・ツーリズム期に一般的に問題となる観光開発による大規模な自然破壊は起こらなかった。砂丘保護の運動は観光促進のために砂丘を植林から守ろうという主張が中心であり、砂丘保全と観光促進は歴史的には対立してこなかったのである。このため、砂丘の保全や観光のあり方についてのこれまでの議論では、自然保護や生態系保全（エコロジー）という考え方が前面に出てこなかった。1990年代になると、今度は砂丘を地域活性化の「手段」として利用するという視点が前面に出てきたように思われる。現在、砂丘観光が自然体験型観光に向かっていることは先に述べたが、もし自然体験型観光が自然環境の中で行なう活動としてのみ捉えられ、砂丘が地域活性化を目的とした自然消費型のレクリエーション地として再開された場合、観光振興と砂丘保全の対立が顕在化してくる可能性がある。観光振興の名の下に、砂丘景観がさらに悪化するか、もしくは景観の再生が遅れることになれば、砂丘観光そのものの価値が低下することになる。砂丘そのものが再び犠牲になることがないようにするため

にもエコツーリズムの理念を砂丘観光政策の中心に据えることが重要である。

砂丘観光ではすでにエコツーリズムの実践に向けた芽がでている。地元住民による自然解説活動や夜の砂丘の体験などはエコツアー開発の核となり得る。この他にも、砂丘環境の調査補助や除草ボランティアなど砂丘保全活動を加えたエコツアーの開発やゴミ廃棄ゼロなど環境に配慮した仕組みづくりなどがエコツーリズムの具体的な活動として考えられる。

低迷する砂丘観光を復活させるためには観光に新しい視点が求められるが、その際には砂丘の独自性を考える必要がある。砂丘の独自性というのはまさに日本にひとつしかない砂丘の景観そのものであり、それが観光客をひきつけていると思われる。したがって、砂丘の景観を取り戻すことが観光地としての砂丘の魅力を向上させる最も有効な方策である。その上で、貴重な自然を保全しながら自然をそのまま観光に生かすというエコツーリズムを展開することが21世紀の砂丘観光のあり方であろう。

昔の砂丘を知っている人は、砂丘は幽玄であり、砂丘では自然に対する畏怖を感じたという。それを感じさせてくれる観光というのがまさにエコツーリズムなのである。砂丘を地域活性化の単なるツールと見なして、砂丘から直接、経済的な利益を得ることのみに力点を置くのではなく、砂丘保全を核として自然と人間の共生について考える場として砂丘を捉えていくことが望ましい。

鳥取砂丘とその政策の変遷

年	砂丘環境の変遷	年	利用政策	年	保護政策	観光	年	砂丘観光
1948(23)	本格的植林開始	1951(26)	県植林計画発表	1952(27)	文化財として保存する案再燃		1953(28)	砂丘ブーム到来(約28万人、1954年)
		1952(27)	鳥取市、鳥取大学、砂丘地分割合意	1955(30)	天然記念物指定・国定公園指定		1955(30)	砂丘観光客急増(約80万人)
		1953(28)	浜坂、賀露海浜地下げ実行、植林(昭和47年まで造林義務付け)	1957(32)	指定区域の拡大決定・保留申請			
1961(36)	防風林帯の背後にある天然記念物としての砂丘に影響が開始			1962(37)	鳥取砂丘調査報告書第一集(砂丘保護の提言)	(上昇期)	1960(35)	遊覧馬の営業開始
1963(38)	植林終了			1963(38)	天然記念物拡大指定(113ヘクタール)山陰海岸国立公園に昇格・中心部113ヘクタールが特別保護区に指定		1965(40)	観光客急増(100万人突破)
		1965(40)	国道9号線開通	1969(44)	国立公園特別保護区の保護状態一覧表で鳥取砂丘に×印	(最盛期)		
		1969(44)	砂丘道路開通	1971(46)	伐木運動(鳥取商工会議所、市観光協会、速山先生)			
		1971(46)	鳥取市と浜坂地区、伐木で合意					
1972(47)	植林除去(第1次、第2期)	1972(47)	植林地域を地区へ無償譲渡				1972(47)	観光客過去最高(228万人)以降減少
1974(49)	植林除去(第1次、第2期)(急速に草原化現象開始)	1975(50)	千代川の河口付け替え事業着工	1977(52)	鳥取市、鳥取砂丘対策懇談会設置	(停滞期)		
1978(53)	植林除去地の雑草繁茂・除草問題			1978(53)	天然記念物追加指定(146ヘクタール)			
1982(57)	植林除去(第2次)			1980(55)	天然記念物鳥取砂丘調査報告書		1980(55)	県営鳥取青年の家
1983(58)	植林除去(第2次)	1983(58)	千代川の河口付け替え事業終了				1982(57)	砂丘パレス閉鎖
				1988(63)	天然記念物鳥取砂丘追跡調査報告書(伐木の効果を確認)	(復活模索期)	1989(1)	砂丘アザインフオーラム発足
1990(2)	草原化による砂丘景観の悪化			1990(2)	草原化による砂丘景観の悪化		1990(2)	鳥取砂丘砂かけフォーラム発足
1991(3)	除草実験開始(以降、毎年除草)	1991(3)		1991(3)	除草実験開始		1996(8)	砂丘博物館計画発表
				1998(10)	鳥取砂丘景観保全協議会設置		1999(11)	砂丘博物館計画凍結
				2004(16)	鳥取砂丘室の設置		2000(12)	鳥取砂丘新発見伝事業開始
					砂丘再生の方針決定		2001(13)	砂丘観光活性化のための提言
							2003(15)	鳥取砂丘観光活性化協議会設置

() 内は元号

大村(1993)、(財)自然公園美化管理財団(1995)、新聞記事等を参照・加筆

<参考文献>

- 岡本伸之（2001）『観光学入門』有斐閣。
- エコツーリズム推進協議会（1999）『エコツーリズムの世紀へ』。
- 大村康久編（1993）『鳥取砂丘』富士書店。
- 上岡克己（2002）『アメリカの国立公園』築地書簡。
- 環境省（2004）『エコツーリズム推進マニュアル』。
- 財団法人自然公園美化管理財団（1995）『新・美しい自然公園 13 - 鳥取砂丘』。
- 砂丘デザインフォーラム開催委員会（1990）『砂丘デザインフォーラムからの提案』
- 竹内芳親（2004）「草原化の砂丘から教えられた砂丘再生への道筋〔I〕写真が示す鳥取砂丘の変遷」（『TORC レポート』No.22 春）。
- 田中寅夫、星見清晴、松田晃幸（1994）『鳥取砂丘ものがたり』鳥取市社会教育事業団。
- 鳥取県（2003）『平成 14 年観光客入込動態調査結果』。
- 鳥取県教育委員会（1961）『鳥取砂丘調査報告書（第一集）』。
- （1964）『鳥取砂丘調査報告書（第二集）』。
- 鳥取県文化観光局（2004a）『鳥取砂丘景観再生事業』。
- （2004b）『鳥取砂丘観光活性化推進事業』。
- （2004c）『鳥取砂丘新発見伝事業』。
- 鳥取県農林水産部造林課（1985）『鳥取県の海岸砂地と造林事業の概要』。
- 鳥取砂丘景観保全協議会（2004）『鳥取砂丘景観保全調査報告書』。
- 鳥取砂丘新発見伝実行委員会（2002）『鳥取砂丘新発見伝 2002』。
- 鳥取砂丘観光活性化懇談会（2001）『私たちの誇り 鳥取砂丘—鳥取砂丘観光活性化のための提言』。
- 鳥取砂丘調査会（1988）『天然記念物鳥取砂丘追跡調査報告書』
- 鳥取市教育委員会（1980）『昭和 54 年度天然記念物鳥取砂丘特別調査報告書』。
- 鳥取市議会（2004）『3 月定例会議事録』。
- スー・ビートン（2002）『エコツーリズム教本—先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド』平凡社。
- 毎日新聞社編（1958）『鳥取砂丘』毎日新聞社。
- 吉田璋也編（1975）『鳥取砂丘』牧野出版。

World Ecotourism Summit (2002) Quebec Declaration on Ecotourism.

WTO-UNEP (2002) “WTO-UNEP Concept paper ?International Year of Ecotourism 2002” ,(unpublished document).

オーストラリアエコツーリズム協会 : <http://www.ecotourism.org.au/>

環境省 : <http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/>

世界観光機関（WTO） : <http://www.world-tourism.org/sustainable/IYE-Main-Menu.htm>

鳥取県文化観光局 : <http://db.pref.tottori.jp/bunkakankouhp.nsf>

鳥取砂丘新発見伝実行委員会 : <http://www.tottorisakyu.jp/index3.html>

鳥取大砂丘観光協会 : <http://www.sakyu.gr.jp/>

福部村 : <http://www.sakyu.fukubeson.net/>